

台湾の歴史と文化をたずねて

広島大学マスタース会員 塩谷 優

筆者はこれまで学会出席や共同研究を兼ねてしばしば外国を訪ねたが、基礎的な学問分野、'分子科学'を専門とすることもあり、訪問先は欧米に偏り台湾を訪れる機会がなかった。中国の急速な経済成長に伴い、良きにつけ悪きにつけ日頃中国に関するニュースに接することが多く、相対的に台湾の影が薄れるように感じられる。中国や韓国との間でいわゆる'歴史認識問題'が政治問題化しているが、台湾との間ではそのような問題は表面化せず、親日的な人が多いと聞く。台湾について断片的な知識しかなく、一度台湾の空気に直接触れたいと思っていた矢先、広島大学マスタース海外研修旅行「台湾の歴史と文化をたずねて」の企画を知り、妻と友人を誘い参加することとした。3泊4日と長くはなかったが、充実した研修旅行であった。旅行中見聞したことの内、特に印象に残ったことを二三記し、旅行の感想としたい。



圓山大飯店から台北市街を望む

● 八田與一記念区見学（台南市、烏山頭水庫）

八田は水利技術者であり、日本統治時代の1920年から30年にかけて「烏山頭ダム」の建設を主導した人物である。水力発電と嘉南平野の灌漑事業に貢献し、台湾農業の父とも呼ばれている。訪台2日目の午後、烏山頭ダムに隣接する記念区を見学した。展示館には八田技師の生涯と貢献が詳しく紹介されており、公園内に立つ銅像はダム建設に協力した人たちと恩恵を受けた農民により建立されたという。

八田は石川県出身で、筆者と同郷である。以前より名前を聞いており、機会があれば烏

山頭を訪ねたいと思っていた。嘉南平野に‘カガ’という地区があると聞く。石川県の加賀平野は加賀百万石の中核をなす穀倉地帯であるが、戦国時代までは白山山系を源とする手取川の氾濫に悩まされ、その治水が大きな課題だった。また、江戸時代の初期、10kmにおよぶ「辰巳用水」が整備され、高低差を利用して兼六園と金沢城に配水された。これらの郷里に蓄積された水利技術を八田は知っていた筈である。烏山頭ダム建設と灌漑事業遂行の一助となったのではないかと勝手に想像しながら見学した。

● 日本統治体験者の話

訪台 2 日目の夕刻、陳添波さん（台北市ガイド職業工会理事長）から日本統治時代（1895-1945）を中心とした台湾の歴史の一端を聞いた。統治初期の民政局長（のち長官）後藤新平による衛生行政やインフラ整備についての話が印象に残った。後藤はマラリア、ペスト、赤痢などの防疫対策、上下水道整備、アヘン売買管理、学校教育の整備などに力を注いだ。さらに、後藤は民政局殖産局長（兼糖務局長）として新渡戸稲造を台湾に招聘した。新渡戸は名著「武士道」の著者であるが、農業経済の専門家でもある。台湾の精糖産業の発展にも大きな足跡を残した。また、根本博中將にも触れられた。彼は終戦後に台湾に渡り、1949年の金門島での中共軍との戦いを指揮し、中共政府による台湾奪取による統一を阻止し、今日に至る台湾の存立に貢献したとのことである。

戦後は外省人・蒋介石総統率いる国民党による中華民国時代となるが、戒嚴令の時代でもあった。38 年間におよぶ戒嚴令が解除され、台湾に表現の自由が浸透してゆくのは、蒋介石の子・蒋経国総統が亡くなり、本省人・李登輝総統の時代が始まる 1988 年からである。陳さんは警察畑で職を得ていたが、彼の率直な言動が秘密警察に睨まれ、10 数年におよぶアメリカとカナダでの亡命生活を余儀なくされたとのことである。

● 黄美惠準教授の講演

訪台 3 日目の午前、台北・中国文化大学を訪問し、黄美惠先生から「台湾の歴史と文化」につき話を聞いた。冒頭、黄さんは日本と台湾の文化の親近性に言及された。台湾では 80 代の方は日本の童謡「証城寺の狸囃子」（野口雨情作詞、中山晋平作曲）を歌えるし、40 代の私は「ぞうさん」（まどみちお作詞）を歌えると言われたのが印象深い。オランダ統治（1624-1662）、鄭成功の時代（1662-1683）、清朝統治（1683-1895）、日本統治（1895-1945）、中華民国時代（1945- ）と続く台湾の歴史につき概説し、台湾語の多様性（閩南語、客家語、原住民語）や台湾人の構成（漢族と原住民）にも触れられた。現在の台湾は人口 2,300 万人（台北は 262 万）を有する近代工業国家に成長している。

陳さんは台湾の近代化に貢献した日本人として、後藤新平、新渡戸稲造および八田與一の 3 名を挙げられたが、黄さんは、さらに、羽鳥又男、新井耕吉郎、磯永吉および末永仁の 4 名を追加された。羽鳥又男は最後の台南市長（1942-1945）として戦時下の困難な時期によく市政を掌握し、大きな業績をあげられた。特に、「孔子廟」や「赤嵌楼」などの文化財の改修・保全に務められた。戦後も行政アドバイザーとして台南市に残り、技術移転のために留用された邦人のお世話もされた。新井耕吉郎は、総督府中央研究所魚池紅茶試験支所（現

在の茶業改良場魚池分場)にて紅茶の栽培を開始(1936年)された方で、地元では台湾紅茶の開祖と尊敬されているとのことである。

磯永吉は末永仁と協力して台湾米の品質改良に取り組み、「蓬莱米」の生産に成功(1940年)し、台湾の農業発展に不朽の業績を残された。磯が教授を務めた旧・台北帝国大学(現・国立台湾大学)の磯永吉小屋には、蓬莱米の父、磯永吉博士、蓬莱米の母、末永仁博士と刻まれた銅像が建立され、二人の功績が顕彰されているとのことである。李登輝元総統は「1965年頃までは、台湾の主な輸出品は蓬莱米と砂糖で、稼いだ外貨が工業化に転嫁され奇跡といわれた経済成長を実現した」(磯永吉-Wikipedia)と述べている。なお、磯永吉は広島県三次市吉舎町の旧日彰館中学(現・県立日彰館高校)出身の方と知り、親近感を持った。

最後に、黄さんは「湾生」に言及した。日本統治時代に台湾で生まれた日本人のことである。戦後、約40万人の台湾在住の邦人が日本へ送還されたが、その半数が湾生とのことだった。ドキュメンタリー作品「湾生回家」の予告編(ビデオ)を見せていただいた。吉野村(花蓮県吉安郷にあった日本人移民村)に生まれた湾生の再訪を題材とした作品である。旧満州や樺太への移民については知っていたが、湾生についての知識はなく自分の不明を恥じた次第である。

50年間におよぶ日本統治時代の台湾では、総督府を通して「アメとムチ」の植民地政策がとられた。特に1937年の日中戦争勃発後は皇民化政策(国語運動、改姓名、志願兵制度、宗教・社会風俗改革など)が推進されたと聞いていた。それにも関わらず、好日的な台湾人が多い理由の一端を、今回の旅行を通して知ることができた。35年間におよぶ日本統治下での朝鮮に於ける植民地政策と如何なる相違があったのか気になるところである。台北では圓山大飯店に二泊した。このホテルは台北市全景を一望できる圓山の丘にたつ宮殿式建築で、蒋介石の妻・宋美齡が迎賓館として建てたとのことである。台湾の歴史と文化を訪ねる旅に相応しい歴史の重みを感じるホテルであった。4日間の旅行中、現地ガイドの張魁麟さんには大変お世話になった。張さんは博学な熱血漢であり、台湾の歴史と目覚ましく経済発展した現在の台湾について熱く語ってくれた。大陸から押し寄せる観光客に対する複雑な感情の吐露が耳に残っている。

今回の広島大学マスターズの海外研修旅行「台湾の歴史と文化をたずねて」を企画して頂いた代表幹事の渡部和彦先生および世話係の原野昇先生に感謝いたします。